

秋川雅史の

美 の 仕 事

今月号は、テノール歌手・秋川雅史さんと訪ねる「美の仕事」。いつもと趣向を変えて、彫刻に深い興味を持つ秋川さんとともに、仏像彫刻と修復の現場を訪ねました。

第七七回 中村彫刻（神奈川）
生まれ変わる仏像





整理整頓が行き届いた中村さんの工房。現在制作中の「俱利伽羅剣」や修復中のお像をみせていただいた

● 道具を大切にしている心が表れた工房

今回訪れたのは、横浜山手町にある静かな住宅街。白いモダンな一軒家です。ここに仏像の制作と修復を手掛ける彫刻家、中村恒克さんの工房「中村彫刻」があるのです。

半地下部分にある工房は、戸棚にいい香りのする檜や榿の木材が並べられています。仏像の彫刻に使う檜や榿は樹齢数百年の大きなもので、乾燥させる為に何年も保管されています。

工房の壁には小ささまざまな鋸、木箱にはあらゆるサイズの彫刻刀や鑿が整然と納められています。全体に掃除や整理整頓が行きとどき、中村さんの道具を大切にしている心がよく表れています。

そんな中村さんとの出会いはおよそ6年前、修復展で仏像修復の説明をしていた中村さんに、木彫や修復に関するアレコレを質問したのがきっかけでした。私には木彫の師がおりまして、さまざまな知識や技術の指導を受けましたが、東京藝術大学大学院で文化財保存学を修めた中村さんの知識はまたちがうんですね。おもしろいんです。すっかりファンになりました。中村さんが独立されてからは私蔵品の修復をいくつかお願いするようになりました。誌面では「中村さん」と書かせていただきますが、いつもは「恒くん」と、親しく呼ばせていただいています。

● 価値を尊重し、過剰な修復はできるだけ避ける

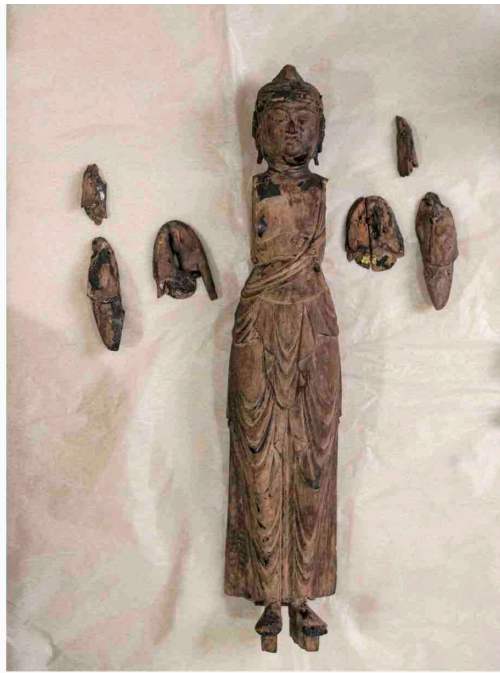
工房で、現在修復作業中のお像をいくつか見せていただきました。高さ約30センチの「観音像」（139頁右上）、これは平安時代の「定朝様」のものらしいのですが、中村さんいわく「有名な平等院鳳凰堂の阿弥陀仏は、薄い、雅みやびなお体ですが、このお像はけっこうな厚みがあり、まるで鎌倉時代の仏像ほどのボリューム感です。『定朝様』のお像ではありませんが、別の流れも感じさせたいへん



修復中の円空像（左上）と蔵王権現に似たお姿のブロンズ像（左下）

右上：平安期の観音像

右下：獅子像。損傷が激しいが、力強い造形が残る



興味深いお像です」とのこと。

高さ約15センチの木像は「円空仏」（139頁左上）です。「円空仏」であるとした根拠は、一方が古い書籍にある写真と同じだったため。もう片方は、丁寧で細かい彫りから、円空の、初期の作品、ではないかと中村さんは考えています。近年人気が高騰している円空の仏さま。初期の作品は、なかなかお目にかかれない「貴重なお像」と言えるでしょう。

数多くの修復作業を手掛けるなか、新しい発見や出合いは少なくないと言います。

おもしろいエピソードを2つご紹介いただきました。

ひとつは、先ほどご紹介した定朝様の「観音像」。

「実はこのお像、全身に二層ほど、後から塗られた彩色がありました。それをすべてはがしたら、まったく別のお顔が出現したんですよ。鼻口の素晴らしい彫りや、唇の彩色が出現した時は本当に感動しました。体も、衣の柔らかくも整然とした美しい彫りが出てきました」と中村さん。

古い時代のお像は、大小何度かの修理を受けて伝世しています。なかには「新品同様にすることが良い」という価値観で修復されたものもあり、つけたしや、分厚い彩色のため、造形当初の姿が想像できなくなってしまっているお像もあるようです。反して、中村さんは造形当初の「文化的、歴史的価値」を尊重し、過剰な修復はできるだけ避けたいと言います。お像がそれまで歩んできた年月を尊重した修復を心がけているのです。この「観音像」は、中村さんによる丁寧なクリーニングにより、お顔だけでなく足先や腕まですべて、平安時代当初のものが残ったすばらしいお像だとわかりました。「お寺などにあれば重要文化財クラスだったかも？」と言うから驚きです。



秋川さんが中村さんに修復をお願いしている聖観音像。なんともお顔がすばらしい。



秋川雅史

あきかわまさこふみ

愛媛県西条市出身のテノール歌手。国立音楽大学、同大学院卒業後4年間イタリアのパルマで修行。帰国後ベートリヴェンの第九ソロなど、さまざまなコンサートに出演し、1998年にはカンツォーネコンサートで第一位、日本クラシック音楽コンクール声楽部門最高位をそれぞれ受賞。2005年、アルバム「威風堂々」を発売し、翌年シングルカットされた「千の風になって」が話題を呼んでその年のNHK紅白歌合戦に出場。翌年の1月22日付オリコン音楽チャートで第一位を獲得するなど大ヒットとなった。現在はクラシック音楽を基本に日本の音楽とを融合させたコンサートやテレビ番組などで活躍している。

「古い仏像をいちかばちか買ってみて、お顔の塗装をはがしてみれば、大発見！」……、そんなことが古美術の世界にはあると言いますが、まさしくこれがそのケースです！

もうひとつは、中村さんが現在「調査中」という高さ約7センチほどのブロンズ像2体（139頁左下）。後の時代に付けられたり亡くなってしまった両腕の「補作」を依頼されました。

一見、「蔵王権現ではないか？」と思う造形です。しかし中村さんは鎌倉時代の仏師快慶がつくった高野山金剛峰寺所蔵の重要文化財「深沙大将立像」と「執金剛神立像」の一对にも似ていると気づいたのです。

深沙大将とは、玄奘三蔵が天竺に赴く途中、流砂のなかに現れて玄奘を守ったと言われる鬼神（多聞天や観音の化身とも言われています）です。これに仏法の護法神である執金剛神を「一对」として組み合わせ、快慶に制作依頼したと言われているのが重源という鎌倉時代の僧侶。

中村さんは、「もしこれらが本当に深沙大将と執金剛神なら、重源に関わりのあるお像と言えるかもしれません。重源さんは、法華経の信仰があった人です。法華持経者は山林修行者でもあり、執金剛神と深沙大将は重源さんの山林修行者としての信仰から一对とされたと考えられています。両像は身に付けられる大きさですので、もしかしたら重源さんが身に付けて、修行していたのかもしれないなど想像が膨らみます。いずれにしても美術史的にとっても意味のある発見になるかもしれません。」と言います。

修復するにあたって、中村さんはお像の時代や尊名を特定するた
め可能な限り調査します。尊名を特定しないと、正しい姿、形での
「補作」もできないからです。また修復する前には必ず「お像の測定」
や「損傷状態の記録」などしっかりと調査をおこない「報告書」を

つくといいいます。これが、修復したお像を「文化財」として後世に伝える大切な資料になるのです。そういった調査のなかで、ときに歴史的発見に遭遇することもある。これぞ、修復という仕事の醍醐味かもしれませんね。

●修復は「ちゃんと取り除けること」が大切

今回見せていただいたお像のうち、もともと損傷が激しかったのが「獅子像」（139頁右下）です。時代は鎌倉時代頃と思われる、もとは文殊菩薩が騎乗していた獅子ではないかと中村さんは考えています。頭部と前脚周辺しか残っておらず、彩色も剥落し、とにかくひどい虫食いです。胸あたりの木肌はクラッカーのようにほそぼそとなり、少し触るだけで簡単に剥がれ落ちそう……。

具体的な修復工程について教えていただきました。

「まず〈燻蒸〉^{くんじょう}といって、お像に潜む虫の駆除や微生物の殺菌を行います。次に剥がれたり、浮き上がってしまった彩色や漆箔を膠でしっかりと定着させる〈剥落止め〉を施し、虫食いや腐食で弱くなった部分に薬剤を浸透させて固め、〈強化〉します。そのあとお像を〈解体〉し古い接着剤などをしっかりと除去します」

修復の要諦は、前回の修理で塗りなおされたり、付け加えられた補修箇所の除去を行い、造形当初の姿がすっきりと見えるようになることです。次に、虫食いや剥落などの損傷を、漆木屎や合成樹脂（パ
ラロイドなど木像の構造強化剤）で補強すること、そうするとお像
自身が持つ造形の力強さが現れると言います。

「膠や漆だけじゃなく、合成樹脂も使うのですね」

意外に思ったため質問すると、
「本当は極力使いたくありません。修復に使用する接着剤で大切な
ことは、除去できることですよ」と中村さん。

一般には「ちゃんをつく」ことが良い接着剤ですが、修復家にとっては「ちゃんと取り除ける」ものが最上だそうです。

「大切なのは長く後世へ残すこと。私が施した修理や補作も、後の時代の人が見て、都合が悪いとなれば、すぐに取り除き、元に戻せるようにすることです。安易にビスを使ったりニスなど塗ってしまふと元に戻せなくなる。ただし、木がスポンジ状になっているなど、今手を加えないと無くなっていってしまう状態の場合、やむを得ず合成樹脂を使用することがあります」

百年先、二百年先のことまで考えろという中村さん。預かったお像を、次の世代にベストな形で残すのが修復する者の責任。「文化財の手渡し」をすることが修復だと学びました。

●顔が生きている。心がある中村さんの作品

中村さんの仕事は修復だけではありません。中村さんご自身の「新作」も見せていただきました。「俱利伽羅劍」(143頁上左)と「弘法大師」(143頁上右)です。

「俱利伽羅劍」は不動明王が右手に持つ剣であり、不動明王の象徴そのもの。俱利伽羅竜王が燃えさかる炎となって剣に巻き付いていることからこの名があります。

「巻き付く龍の、入り組んだ箇所を彫るときは、いろんな方向から刃物を入れて、回したり、ひっくり返したりして彫っています。鱗を彫るのがとく大変です。どんどん彫り進めていくうちに辻褃が合わなくなるので気が抜けません」

実は私も、今ちょうど「龍」を彫っているのですが、その気持ち、わかります。私のは額装の龍なので、半身だけではあるのですが龍は本当に難しい。励みになります。

そして「弘法大師像」。いつも思うのですが、中村さんのつくる

お像は本当にお顔がいい！ 私には平櫛田中をはじめ、大好きな木彫家がいるのですが、なぜ好きかと言えば、やはり「顔」なんです。お顔が生きて、心がある。そういったお像を見ると、心から「いいなあ」って思っています。

「人物像は、顔がやはり難しいですね。このお像には玉眼を入れる予定ですが、眼はいちばん緊張します。眼を入れるための日」を丸1日とって、気持ちを整えなければなりません」

この集中力！ 改めて私は確信いたしました。
中村さんのつくるお像は、やはりいい。

●仏像のことは、まだまだわからないことだらけ

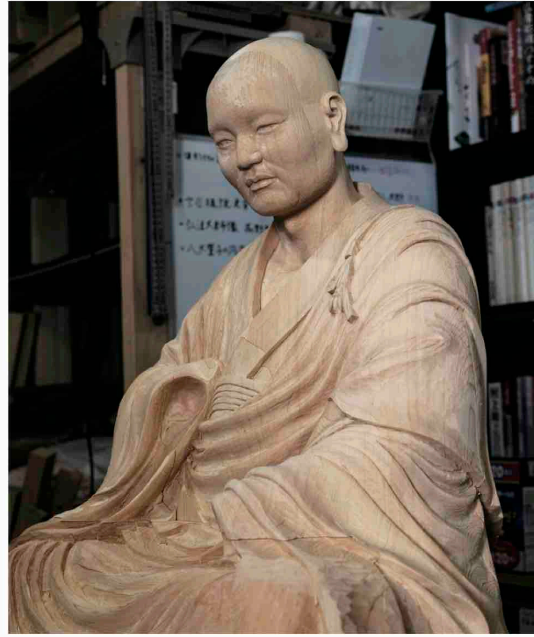
最後に、私が現在、中村さんに修復を依頼している「聖観音像」を簡単にご紹介します(140頁)。

「おそらく江戸時代のものですが、この時代特有の〈泥地〉ではなく、きちんと〈漆箔〉が施されています。とても良いお像で、台座も後背も立派なもの。お寺で信仰するためにつくられたものではないでしょうか？」

正直に言えば、私がお像を購入した理由も「お顔」です。お顔を見て「よし！ これにしよう！」と即決しました。本当に、私自身、仏像を彫ってはいるのですが、仏像のことはまだまだ、わからないことだらけ。信頼する中村さんにこう言ってもらえてうれしーいし、安心します。こうやっていろいろ教えていただくのが楽しくて、さらにたくさんお話を伺いたくなるのです。

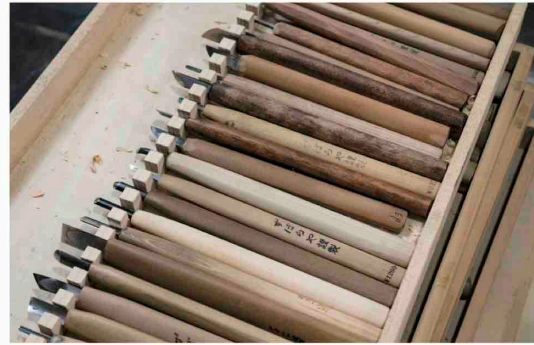
私の「聖観音」は宝冠の修復が終わり、これから台座と後背を組み上げてくださる予定です。完成後は、自宅の玄関に飾るつもり。今からとても楽しみです。

「恒くん！ 時間があいてるときで大丈夫だからね！」



左上：中村さんが制作中の「倶利伽羅剣」。右上：同じく制作中の「弘法大師」。法衣のしわやお顔など、とてもリアル。

下：作業に欠かせない彫刻刀は数百はありそう。どれも切れ味鋭く整えられている。回転砥石の使い勝手など、制作者同士ならではの会話も盛り上がった。木のストックも多く、いちばん香りがいいのは榿とのこと。



中村彫刻
 今回ご登場いただいた中村恒克さんは1986年生まれの33歳。東京藝術大学で彫刻と文化財修復を学び、2016年に独立。仏像修復の合間を縫って自らの作品製作を行っている。個人からの依頼も受け付けているので「中村彫刻」で検索してください。公式サイトをはじめインスタグラムやフェイスブックなどでも活動を発信しています。

連絡先
 045-884-7854
info@isuneyoshinakamura.com

